# 父・柳原ひろむとの思い出　柳原 三佳

新緑の季節になると、毎年、柿の若葉を天ぷらにして、初夏の香りを楽しみます。今年も庭に出て、芽吹いたばかりの柔らかな葉を摘みながら、ふと、

『ああ、この木もお父さんが植えてくださったんだなあ。お父さんなら、この瞬間をどんな句にされただろう……』

そんなことを思いました。

土に触れることが大好きだった父は、松山から遠く離れた千葉の我が家を訪れるたび、野菜や果樹の苗を庭に植えてくださいました。柿の木も、その隣のプルーンも、ブルーベリーも、金柑も……。かつて化学の教師をした経験を持つ父の植物栽培は、土のpHから肥料の配合まで、常に科学的に裏打ちされていました。

「お父さん、今年も美味しい実がなりました。ブルーベリーで、ジャムもいっぱい作りましたよ」

収穫の時期に電話でそんな報告をすると、

「そうかな、それはよかった」

穏やかで、嬉しそうな声が、いつも受話器の向こうから返ってきました。

四月には、庭の桜も満開となりました。実は、この苗は私たち夫婦が植えたのですが、なぜか二～三年経っても一向に花が咲きません。そこで、父の来訪時に見てもらったところ、接ぎ木の台木の方が成長してしまっているとのこと。早速、余分な枝を切り落とすと、翌年からは、驚くほどたくさんの花を咲かせるようになったのです。

その桜の木は、その後もぐんぐんと背丈が伸び、二階の屋根まで届くほど立派に成長しました。春になり、花が満開になったら、またぜひ千葉に来てもらいたいと思っていたのですが、父と一緒にお花見をすることは、もう、二度と叶わなくなってしまいました。

二〇一九年三月八日、私どもの父・柳原擴（ひろむ）は、数えの八十八歳にて永眠いたしました。「家族そろって、米寿のお祝いを盛大にしましょうね」そんな計画を立てていた矢先の出来事でした。

私は、ひろむの長男である柳原解雄の妻で、結婚三十四年目になります。主人の実家に帰省するのが楽しみで、主人が仕事で帰れない時でも娘と一緒に遊びに行ったり、私自身の出張の折にはひとりで実家に泊まるなど、主人の両親に会うことがとても楽しみでした。

そんな話を友人にすると、「ミカは本当に幸せなんやね～」とよく言われたものです。

父と私たち夫婦は、お酒と美味しいものが大好き、という共通項もあり、一献傾けると、さらに会話が弾みました。その大きな手のひらで軽々と持ち上げられた一升瓶は、まるでビール瓶のように見えたものです。

私たちが帰省するときには、瀬戸内の新鮮な地魚の刺身を用意して、今か今かと待っていてくれた父。松山と千葉は遠く離れていたので、頻繁に会うことはできませんでしたが、久しぶりに顔を合わせての親子の会話は楽しく、私たちは五十を過ぎても、愛情いっぱいの父のもとで、ずっと甘えてきたような気がします。

俳人であった父は、文筆業を続けてきた私たち夫婦にとって、偉大な師でもありました。今も執筆活動の傍らに『歳時記』があるのは父の影響です。ときどき、原稿の表現について相談することもありました。

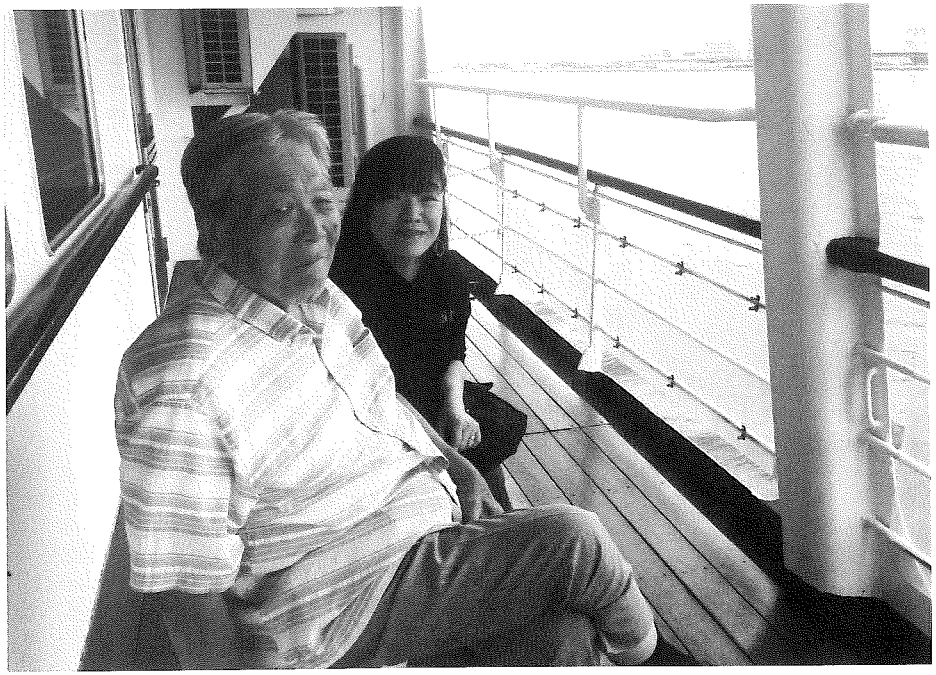
また、昨年末、私は『開成をつくった男、佐野鼎』（講談社）という歴史小説を上梓しました。この本の中に、幕末の遣米使節団がフィラデルフィアでチェスクラブの米国人に将棋を教えるというシーンが出てくるのですが（実際の出来事です）、このとき父は、将棋のことをよく知らない私のために、チェスと将棋の共通点について色々調べ、資料を提供してくださいました。

父との俳句談義も、また楽しいひとときでした。振り返れば、父はまさにその行動のすべてが、「吟行」のような人でした。

あれは結婚して間もない頃、主人の運転で、父と一緒に伊勢志摩へドライブに行ったときのことです。ちょうど夕暮れどき、英虞湾が一望できる展望台に車を止めると、リアス特有の入り組んだ海岸線が真っ赤な夕陽に照らされていました。

そのとき、父は思いついたようにメモ帳を取り出すと、





懐かしの「くれない丸」で横浜港クルーズ中のひろむさんと三佳さん

素早くペンを走らせました。

英虞湾のかたち染め抜く大夕焼け　ひろむ

わずかこれだけの文字で、眼下に広がる圧倒的な光景を見事に切り取った父。

『俳句って、すごいんだなあ……』

私たち夫婦の心には、今でもこの俳句があのときの情景とともに刻まれています。

父とはその後も、国内外のさまざまな地を旅しました。十二年前、オーストラリアのポートアデレードというしっとりとした港町を散歩しているとき、ちょうど歩道の街路樹には桜によく似た花が咲き誇っていました。満開でしたが、花の盛りは少し過ぎていたのでしょう。海からの爽やかな風に吹かれて、花弁がまさに吹雪のようにはらはらと舞い降りてきます。

父は手のひらを上に向け、その花弁をすくうようなしぐさをしながら街路樹に近づくと、じっくりと観察し始

めました。

「これは、日本ではあまり見かけん木じゃなあ」

「そうですねえ。桜とは少し違いますねえ」

「ああ。桜より少し小さくて色が薄い。それにしても、日本は秋だというのに、こちらは春で花が満開……。面白いもんよ」

「南半球用の歳時記って、あるんですかねえ～？」

そんな話をしながら、父と楽しく歩きました。

日本に帰ってから数日後、父から弾んだ声で電話がありました。

「三佳さん、この間、ポートアデレードで見た、あの花の名前が分かったぞな」

「えっ、何の木だったんですか？」

「アーモンドじゃ、アーモンドに間違いなかろう」

父は図鑑などで丹念に調べたようです。

あの旅で父が作った俳句の数々をもう一度読み返したかったのですが、メモ帳が見つからず、この原稿に記載できなかったのが残念なのですが、いつか父との旅の思い出として、句集にまとめられればと夢見ています。

父が亡くなって早や三カ月がたとうとしています。四月末には松山・石手寺の地蔵院にて四十九日法要を無事に終えることができました。次は新盆と納骨ですが、その段取りについて話し合っているとき、実に不思議なことがありました。

たまたま、何年も手付かずだった我が家の本棚の大整理をし、本や書類を全て取り出しているとき、古びたカードの束が出てきたのです。それは、主人が少年時代、当時の「国鉄」に乗って旅をし、立ち寄った駅で押したスタンプカードでした。鉄道だけでなく、今はなき「宇高連絡船」などが次々と登場します。「これは懐かしい」と言いながらそれらに見入っていると、一枚だけ、かすれた手書き文字のカードが紛れていることに気が付きました。

日溜りのこの冷たさよ骨納む　ひろむ

それはなんと、父が約四十年前に作った俳句だったのです。

父は四十代の後半に、自身の父親、そして仲のよかった弟を、相次いで病で亡くしていました。当時、高校生だった主人は、初めて見る憔悴しきった父の姿をはっきり覚えていると言います。前記の句は、まさにそのときに作られたもので、父に「何か書くものあるか？」と言われた主人がたまたま差し出したのが、このスタンプカードだったのです。

なぜ、この俳句がカードの束の中に埋もれたままだったのか…、その理由はわかりません。しかし、この時期に偶然、私たちの前に姿を現したこの十七文字は、あのときの父の思いを鮮明に蘇らせました。主人もきっと、父の納骨を前に溢れる思いがあることでしょう。その直前に、父の俳句の奥深さを、改めて感じた出来事でした。

父がどこへ行くにも必ず持ち歩いていた『歳時記』は、今、私の手元にあります。

実は、この歳時記は一度、棺に納められました。父が天国に行っても俳句を作れるように、という母の思いを込めて……。ところが、葬儀社の方から「本は棺に入れられないんです」と言われ、火葬の直前に取り出さざるを得ませんでした。

それを聞いたとき、私は残念だと思う一方、「お父さんの歳時記が、焼かれずに済んだ！」という嬉しさがこみ上げ、思わず涙してしまいました。それを見ていた母が、父の形見としてその歳時記を私にくださったのです。

手垢がつき、背表紙がテープで何重にも補強された『歳時記』は、知らない人から見れば単なる古本かもしれません。でも、私にとっては父との思い出がいっぱい詰まった、大切な宝物です。

最後になりましたが、『雲雀』の皆さまには、生前父が大変お世話になりました。

家族を代表し、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

柳原三佳様は、故・柳原ひろむ様のご長男・解雄様の奥様で、ジャーナリスト、ノンフィクション作家としてご活躍です。ひろむ様の追悼文をお寄せいただきました。

ここに謹んでひろむ様のご冥福をお祈りいたします。

雲雀編集部一同